

文章・談話研究

石黒 圭

文章と談話の違いについて考える場合、「書き言葉としての文章」対「話し言葉としての談話」、「産出の結果としての文章」対「産出のプロセスとしての談話」という二つの立場がある。そのいずれの立場に立つとしても、2010年は談話の年であったという印象が強い。なかでも、①非母語話者の産出を対象とした研究の展開、②研究対象となるジャンルの多様化、③談話特有の機能を担う表現の記述的研究の増加、の3点が目立った。

まず、①非母語話者の産出を対象とした研究の展開であるが、日本語教育が円熟期に差しかかりつつあることを示唆しているように思う。魏志珍「台湾人日本語学習者の事態描写における視点の表し方—日本語の熟達度との関連性—」『日本語教育』144、烏日哲「中国人日本語学習者と日本語母語話者の語りにおける説明と描写について—『絵本との一致度』の観点から—」『日本語教育』145、全鍾美「初対面の相手に対する自己開示の日韓対象研究—内容の分類からみる自己開示の特徴—」『社会言語科学』13-1などが挙げられる。とくに、日本語ができない日本語学習者がどのように談話産出を習得し、日本語母語話者に近づくかという研究だけでなく、日本語が堪能な日本語学習者でも、その社会・文化的背景から日本語母語話者とは異なる個性を有するとする研究の出現に、将来性を感じた。

つぎに、②ジャンルの多様化であるが、対話ではなく、講義という独話に多面的

な光を当てた佐久間まゆみ編著『講義の談話の表現と理解』くろしお出版がその代表であり、田中啓行「講義の『談話型』に基づく受講ノートの『文章型』の分析」『表現研究』92もその流れにある。一方、電子テキスト系の研究にも勢いがあり、大沢裕子・郷亜里沙・安田励子「インターネット上のクチコミにおける苦情への返答—サイト閲覧者の視点から—」、田中弥生「質問サイトにおける情報要求モデルと待遇コミュニケーション—『アットコスメ美容事典』の談話機能・談話構造の分析から—」、李錦淑「『誘い』とそれに対する『断り』の言語行動について—日本語母語話者同士による携帯メール会話の分析から—」（いずれも『待遇コミュニケーション研究』7所収）などが見られた。今後、こうした傾向はますます強まりそうな気配である。

最後に、③談話特有の機能を担う表現の記述的研究の増加であるが、フィラー・相づち研究は健在であり、大工原勇人『日本語教育におけるフィラーの指導のための基礎的研究』（神戸大学博士論文）、石川創「あいづちとの比較によるフィラーの機能分析」『早稲田日本語研究』19、原田幸一「現代東京の話しことばにおける言語形式「たしかに」—大学生による日常会話をデータとして—」『社会言語科学』13-1などが見られた。一方、談話の構造を担うものとしては、中俣直己「並列を表す接続詞の体系的分析」『日本語文法』10-1の接続詞と、寅丸真澄「講義の談話におけるメタ言語表現の機能」『早稲田日本語研究』19のメタ言語が、今後も引き続き研究者の関心を集めそうな予感がある。

（一橋大学）